

「浙江大学スプリングスクール参加報告書」

京都大学農学部 2年 小瀬貴美子

- ① 中国語の勉強は1年以上前から一切やっていなかった。昨年の夏にアメリカで中国人の友達ができ、中国語が全然使えなかったことが悔しくて、これを機会に勉強しようこのプログラムに参加した。現地の本屋に行くと日本人作家の小説があったり漫画があったり、日本のアニメやドラマに関心があったりと日本と中国の関係は深いと感じた。また帰国してからも、中国人観光客や働いている中国人に目が留まり、その数が多いことが明らかであった。これからの社会を生きていくうえで中国語を学ぶことは有利となるであろうから、継続的に中国語の勉強をしていきたい。
- ② 経験として、まず私が一番関心のある食のことについて、中国の料理はほんとおいしくて安いという印象である。大学の食堂では15元ぐらいで満足できるぐらい食べることができた。日本でもなじみのある中華料理はもちろんのこと、普段食べない唐辛子や山椒などの香辛料がたくさん入った料理があった。私は辛いものが苦手であるが、おいしいと感じる料理もあった一方、本当に辛すぎて食べられないと感じた料理があった。そんな料理に対して現地の学生は少し辛いが慣れていて、と言っていて驚いた。もう一つ、現地に言って驚いたのは、中国人のほとんどの人が現金を持たないことである。中国ではスマートフォンを利用して支払いをするのが当たり前の社会であった。学生寮のコインランドリーも支払い方法がスマートフォンしかなく、他人に頼んで行っていた。日本でもその方法は存在するが普及率は低い。中国での普及率の高さに驚いた。
- ③ プログラムの内容としては、現地に到着した次の日に面接形式で試験が行われ、レベルごとに分けられた。そしてそこから、平日の午前中に90分の授業が2コマほどあった。週に2回だけ90分ではなく135分の授業があった。口語、リスニング、文法やスピーキング、の3種類の授業であった。世界各国からやってきていたおよそ20人のクラスであった。このプログラムには京都大学のほかに東京大学と静岡県立大学から生徒がやってきていて、私のクラスには静岡県立大学の方も何人かいた。授業は先生が生徒にあて、積極性が求められるものであった。また、先生がSNSでクラスのグループを作り、課題をそのSNSグループで提出することがあり、驚いた。授業は午前で終わることが多く、午後は浙江大学の生徒のボランティアの方々が杭州のお茶やシルクの博物館や歴史記念館に行くことを計画してくれていた。西湖に行ったり、杭州にあるSUPCONという企業を訪問したりと充実した日々を送ることができた。このプログラムの中でこのボランティアの方との出会いはとても大きなものであった。日本語で話しかけてくれたり、中国語で会話してみようとしたが伝わらないときは仕方ないから英語で伝えてみたりした。ボランティアの方々はほんとおやすしく、おすすめを教えてくれたり、困ったとき助けてくれた。
- ④ 今回の留学経験で中国への見方が少し変わり、以前は中国には絶対住みたくないと思っていたが、中国もそんな不便ではないし、むしろ発達している面も多いと感じた。将来を考えたときに中国にもかかわっている会社を調べてみようと思った。